英語グループ　准教授　加賀谷真澄

研究テーマ：19 世紀における貧民表象―日英比較研究

研究の特徴：本研究は明治期を研究対象としており、ある時期に流行した言説が、特定の集団を特殊化していこうとする力学とその背景を明らかにすることを目指す。

研究紹介：

明治初期、貧民を題材にした読み物が流行した。自ら貧民街に潜入し、取材をした作家として、桜田文吾（1863～1922）、松原岩五郎（1866～1935）、横山源之助（1870～1915）らが挙げられる。彼らは貧民街に潜入し、住民の生態を詳細に報告した。作家たちは、都市のど真ん中に貧民街が出現した現象を、西欧をモデルとして理解しようとしたと考えられる。というのは彼らの記述には、西欧社会・西欧で出版された雑誌・書籍への言及がたびたび見られるからである。日本より早く農業社会から工業社会への移行を経験していた西欧諸国では、都市のスラムを取材した記事や書籍が評判を呼び、社会の関心を集めていた。日本の記者・作家たちは、都市の貧民コミュティを、一般の社会異なる「暗黒社会」として描いたが、欧米のジャーナリズムを研究し、それを手本として日本の貧困を描いた痕跡が見られる。本研究は、日本の明治期の貧民表象が、西欧のジャーナリズムから大きな影響を受けていること明らかにする。

またこの他に平行して、明治期に渡米した日本人留学生の調査も行っている。貧困表象の流行から 20 年ほど経て、一般庶民の中で渡米ブームが起きた。急激な近代化から生じた社会のひずみ（貧民表象）と、その後一般庶民上昇志向（渡米ブーム）までの社会の変化、庶民の意識変革を、比較文化・文学の視点から読み解いていく。

図１イギリスの雑誌　『パンチ』

図２　アメリカの学生名簿に残る日本人女子学生の名前

研究業績（2015 年度以降）

・査読付論文：３件

・査読無論文：５件

・学会報告等：８件

・競争的研究費：２件（萌芽研究２件、主担当）

その他：高大連携授業、国際教養大学との交流事業、「あきたの文芸」審査員担当。